

■天草市崎津・今富の文化的景観



今富は、入り江の最奥に位置し2つの支流が形成するわずかな

迫地形に集落が点在している。江戸中期以降に行われた干拓事業で農地を拡大し農業を、山岳部では山林資源を基にした林業で生業をたててきた。当地はキリスト教布教から潜伏キリシタン、転宗、かくれキリシタンという歴史を有しており、集落を取り囲む後背山には、石碑や墓地が見えない形で配置されるなど解禁後における「かくれ」信仰の一端を見ることが出来る。

崎津

崎津は、中世以来の貿易拠点であり、天然の良港を活かした漁村集落が形成されている。集落中央にたたずむカトリック教会の崎津教会をシンボルとし、山と海に接する狭隘な平坦地に家屋が密集している。軒を連ねる家々に挟まれ形成される海に出るための小路「トウヤ」、その先には船舶の碇泊や漁具の整備・魚干などの生業施設である海上に張り出した構造物「カケ」が設けられ、各家屋には庭がないため、狭い土地の中で効率よく生業を営む土地利用の工夫が窺える。

漁村集落としての崎津、農村集落としての今富は単一の景観だけでなく、生活物資や文物の移動による目に見えない要素を加えることで一体の景観を形成している。ここでは各構成要素が景観に与えるものと目に見えない要素からなる「天草市崎津・今富の文化的景観」の価値を明らかにする。

